

中国人の日本観——魯迅

蘇 德 昌*

中国人的日本观——魯迅

苏德昌

要 旨

日中関係史始まって以来、初の中国国家元首公式訪問として、1998年11月、江沢民国家主席が来日した。日本側は、国民やマスコミも含めて、未来志向で、21世紀に向けての友好協力パートナーシップの構築と充実に大いに期待していたのに反し、中国側は過去の清算に重点を置き、所謂歴史認識の問題に終始こだわった。その結果、日中友好のムードは盛り上がるどころかすっかり冷え切り、折角の訪日が感情的には逆効果になってしまった。

歴史認識は基本的には歴史の真実によるものであるが、日中関係のこの100年は戦争だけではない。それは確かに重要な側面である。日本が深く反省をし、きちんとお詫びするのは当然のことである。しかし、もう一つの交流の側面を見落としてはならない。日本は中国の近代化を促した、言わば触媒の役割を果たした、という評価すべき側面である。

日中関係の根本は国民感情であり、相互理解がその基礎である。中国国家主席訪日も一つのきっかけとなり始まったこの研究の目的は、中国人の日本観を調べるところにある。本稿では魯迅の日本観を彼の一部の言動によって纏めた。

現代中国文化の母とも言われる魯迅は明治維新信仰で、日本を中国の鑑と見た。彼は20代という人間形成の決定的な時期を日本で過ごし、藤野先生という良き師に恵まれた。人生の最後の10年は上海で内山完造や増田渉のような友に巡り会い、その協力も得て大活躍をした。そういった中で、形成された彼の日本観は全面的、友好的且つ冷静なものである。概ね、日本人は真面目である。日本人は物真似がうまいと言われるが、模倣は短所ではない。日本も本当のことが言える処ではない。満州事変・上海事変以降、その反戦姿勢は明瞭である。中国人と日本人は兄弟であり、何時かは相互理解が出来るようになるであろうが、今は難しい。といったようなところである。

魯迅は晩年に至るまで、日本の風光を偲び、日本が懐かしく、日本と日本の友人に思いを寄せていた。

I. 所謂歴史認識

1. 中国国家主席訪日

1998年11月25日から30日にかけて中華人民共和国江沢民国家主席が日本を訪問した。日中国交正常化及び日中共同声明調印26周年、日中平和友好条約締結20周年に当たる節目になる年だけでなく、20世紀も終わりを告げ、21世紀という平和と発展の素晴らしい世紀に入ろうとする時だけに、世の注目を浴びたのは言うまでもない。況してや中国国家元首

日本公式訪問としては日中関係始まって以来初のことであり、日中両方、特に日本から大いに期待された。ところが、その準備の段階から雲行きが少し怪しくなってきた。例の戦争に対する評価の問題である。中国側が発表予定の共同宣言に反省と謝罪の文言を入れろと言って来た。訪問開始寸前の外相同士の交渉を含めた何回かの掛け合いで解決したかに見えたが、結局は国家主席に同行して来た中国共産党中央委員会書記処曾慶紅書記の通告で善処出来なかった。それでも、実質的にも気分・雰囲気的にも訪問には大きな影響等なく、成功裏に終わるであろうと日本側はたかをくくっていたようである。

蓋を開けて吃驚仰天とは正にこのことを指すのであろうが、26日午後行われた小淵恵三首相との会談で、江沢民国家主席は真っ向から戦争に就いて次のように述べたのである。¹⁾

「歴史問題に就いて、中日両国二千年の関係史を振り返って見ると、友好と協力が主流である。然し、近代に於いて、日本軍国主義は何回か中国人民に多大な災難をもたらした侵略戦争を起こした。率直に言って、列強各国の中で中国に最も被害を与えた国は日本である。にもかかわらず、我々は侵略戦争の責任は軍国主義者が負うべきであって、広範な日本人民も同じように被害者であり、彼らとは仲むつまじく付き合い、子々孫々仲良くすべきであると一貫して主張してきた。この既定の方針に変わりがあるはずはない。但し、歴史問題に於ける前向きの姿勢には、歴史を正視し、それを認めるという前提があり、これは又中日共同声明調印・中日平和友好条約締結が依って成り立つ重要な政治的基礎の一つでもある。」

ここには既に日本と中国の戦争責任に対する認識の違いが現れているが、まだそう押し付けがましくは聞こえない。それが徐々にエスカレートして行くのである。

「中日国交正常化してからの26年を振り返って見て、日本国内には歴史問題で事を起こし、歴史の真実を否定する、甚だしいことに至っては歪曲すらする者が後を絶たないという事実を、残念ながら指摘せざるを得ない。これらはみな中国人民を含む戦争被害国人民の感情を極めてひどく傷付け、中日関係の正常な進展を妨害している。」

「日本軍国主義の横行跋扈は曾て、中日両国人民に災難をもたらしたし、中日の伝統的な友好関係は極めてひどい損害を蒙った。軍国主義は中日両国人民の共同の敵であり、人類の平和と進歩の歴史に完全に逆らう流れである。日本政府がこれに対して明確な態度を示せば、先ず日本が引き続き平和と発展の道を進むのに有利であり、次に中国を含む周辺諸国の諒解と信頼を得られるであろうし、尚且つ日本が世界及び地域での積極的な役割を更に一段と果たすことが出来るであろう。」

そして、止めを刺すように、

「歴史問題を解決するカギは日本にある。日本政府が真面目に経験と教訓を汲み取り、歴史を否定し、歪曲する勢力をきちんと抑え込むように望む。」

と、強い口調で言い切ったのである。

それに対し、小淵恵三首相は

「日本政府はここに於いて再度中国に反省の念を表明し、お詫び申し上げる次第でございます。」

「政治家として、自分自身の責任は感じておりますし、日中両国の末永い友好親善に引き続

き弛まぬ努力をするつもりでございます。」

と、述べたようである。³⁾

言わば自分が呼んで来た客からものすごく叱られた訳であるが、果たしてどんな気持だったのであろう。一介の庶民としては理解に苦しむところである。

中国最大の全国紙であり、中国共産党中央委員会の機関紙でもある「人民日報」11月27日の一面のトップ記事が首脳会談であり、題は大きなゴシック体で

「江沢民主席、日本首相小渕恵三と会談

日本政府再度中国侵略歴史に就き反省とお詫び」

と書かれており、その下に少し小さなゴシック体の

「中日、平和と発展のための友好協力パートナーシップの構築に関する共同宣言発表」

という題が見え、宣言の要旨が掲載されており、その四つのポイントの一つが又もや中国侵略に対する日本の深い反省である。

ということは、中国側の狙いはむしろ未来より過去にあり、展望より清算にあったということである。

同日の天皇陛下が催された晩餐会の席上、天皇陛下はその御挨拶の中で、中国が未曾有の大水害に見舞われ、多くの生命が失われたことに触れ、国家主席を労った後に、国家主席の仙台訪問に因み、45年前、皇太子時代の講書始の儀で魯迅の「藤野先生」と「阿Q正伝」を習ったと述べられた。テレビでしか見る機会がないので、詳しいことは分からないが、そのお言葉といい、御表情・御仕草といい、国家主席に大変お気を使われ、最大の友好親善のお気持ちを示されたことには間違いない。

それに対して、国家主席の挨拶は先ず「尊敬する」という、普通このような席では付ける連体修飾語³⁾なしの「天皇陛下、皇后陛下」で始まり、面と向かって軍国主義批判を始めたのである。⁴⁾

「不幸なことには、近代史に於いて、日本軍国主義は対外侵略拡張の誤った道へと突き進み、中国及びアジアのその他の国々の人民に多大な災難をもたらすと同時に、日本人民も大変な損害を蒙った。『前の事を忘れなければ、後の事の師となる』。この痛ましい歴史的な教訓を、我々はいつまでも銘記すべきである。」これが礼節の国とも言われる中国の国家元首が盛大な歓迎宴での挨拶である。本当に異常と言わざるを得ない。

11月28日、早稲田大学での若者に対する講演では、具体的なデータまで挙げて、批判を行った。⁵⁾

「不幸なことには、19世紀末、日本は軍国主義の侵略拡張の道へと突き進み、1894年の甲午戦争で中国の領土台湾を占領した。1905年の日露戦争後一度中国の旅順・大連を占領した。20世紀30年代以降、日本軍国主義は全面的な中国侵略戦争を起こし、中国は軍人・民間人死傷者3500万人を出し、経済的な損害は6000億米ドルを超えた。この戦争は中国人民に多大な災難をもたらし、日本人民もひどい損害を蒙った。」

「正しい歴史観で以て、国民と若い世代を導くべきであって、如何なる形での軍国主義の思潮や勢力の復活を絶対に許してはならない。」

東京記者クラブでの記者会見でも、⁶⁾

「如何に正しく歴史に対処するかという問題は日本がこれまできちんと解決しなかった問題である。我々が考えるには、日本が歴史にきちんとした姿勢で対処し、これらの人々（常に歴史を歪曲し、美化する人々）の誤った言動を抑え込み、正しい歴史観で以て青少年に対する教育を強化し、彼らを導くことは中日関係の末長い発展に有利であり、結局は日本に対しても有利なのである。」

と、日本の言論の自由や統制という制度及び歴史教育のあり方にまで踏み込んだのである。

ここまで言われたのでは、訪問が成功し、日中関係に好影響を与えるはずがないし、1983年に両国政府が確認した「平和友好、平等互惠、長期安定、相互信頼」の日中関係四原則⁷⁾には程遠い。事実、江沢民国家主席訪日以来、世論も国民感情も中国に対しては冷却化してきている。

何故に国家元首公式訪問を利用して、歴史の清算の挙に出たのか、それは国内政治の必要からなのか、それとも日本の更なる援助を引き出すためなのかは本稿の問うところではない。

2. 歴史の真実と認識

歴史の真実は一つしかないけれども、それに対する認識は認識する者の立場・観点・方法の違いによってそれぞれ異なり、千差万別である。例えば、江沢民国家主席は中国従来の見解に則って、極一握りの軍国主義者と広範な人民とを区別し、戦争の責任は前者にあり、後者にはないどころか被害者でもあると言っているが、このような歴史観、或いは階級観は日本では必ずしも通用するとは限らない。それで、国家主席が前者だけを批判するつもりでいても、後者は自分自身のことと受け止めているのである。

「多くの犠牲を出した戦争だけに誰かが責任を負わなければならない。やはり、A級戦犯に責任を負ってもらって」⁸⁾

と、野中広務官房長官は話しているが、これは中国を始めアジア諸国とのことを考慮した上での発言であり、一般国民に受け入れられるとは限らないし、現に即反論が出ている。⁹⁾

「いわゆる歴史問題について、(イ)日本が過去の一時期、中国との関係において軍国主義という誤った道を歩み、中国をはじめとするアジアの人たちに多大の損害を与えてしまったこと、(ロ)これに対し、大多数の日本人は申し訳なく思い、またそのような国策に対する厳しい反省の上に立って、戦後、嘗々と平和国家の王道を歩んできたこと、これは間違いのないところですよ。」¹⁰⁾

と、谷野作太郎中国駐在大使が言っているところからもそれが分かる。批判が厳しければ厳しい程、大多数の日本人の心とプライドは傷付き、謝罪を再三に亘って要求すると、つい「何回、又どうやって謝れば気が済むのだろう」と思い、追い詰められた気持になってしまうのは当然である。これでは友好も何もあったものではない。結果的には反感を買うだけである。

歴史の真実一つ取っても日中双方にはまだまだ食い違いがある。先の戦争での中国死傷者の人数にしる、経済的損害にしる、今までの言い方がまちまちで、¹¹⁾ どれが真実なのかは分からない。いわゆる南京大虐殺事件にしても然り、あったのは事実であるようであるが、その人

数に就いては確定出来ないのが現状であろう。それでも、この100年を振り返って見て、日中間に何回も戦争があったことを否定する者はいないであろう。それらの戦争は全て日本が仕掛け、日本が加害者であり、中国は被害者であるということも事実であろう。その意味に於いては、日本が深く反省し、きちんと謝罪するのは当たり前のことである。但し、歴史の真実はそのだけではない。戦争は一側面であり、表であり、もう一つの側面、裏があるということを見落としてはならないであろう。結論から先に言うと、それは日本は中国近代化の触媒、それも正触媒という役割を果たしてきているという真実である。その意味に於いて、中国は感謝まではしなくてもよいにしても、日本に対してある程度の理解を示すべきであろう。要するに、歴史の真実を全方位から眺めると同時に、相手の認識を努力して理解しようとする姿勢が必要ということである。

19世紀末から20世紀初頭にかけては、日清戦争と日露戦争を起こし、日本は台湾を占領し、満州を勢力圏内に置いた。1906年に設立された南満州鉄道は鉄道・炭鉱・製鉄所・商業・土地の経営等一大コンツェルンを形成し、教育・衛生・一般行政・外交・警察にまで手を伸ばし、満州を支配したが、後に新中国の重要な工業基地になったのも事実である。この間、中国から大勢の留学生が日本に派遣され、ピーク時には1万名を超えた。康有為（1858～1927）、梁啓超（1873～1929）、孫文（1866～1925）等多くの近代化の先駆者が日本に何回乃至10回も渡り、活動している。日本は中国近代化の幕開けに貢献した訳である。

第一次世界大戦・21箇条要求と「五四運動」の時期には、日本はその勢力を東蒙・山東半島・江西省くんだりまで伸ばすが、ヨーロッパ文明・近代思想の導入及び普及も殆ど日本経由であったし、マルクス主義さえも同じである。筆者の本務校であった上海の復旦大学の元学長で、すぐ隣に住んでいた陳望道氏は日本語版から「共産党宣言」を訳したのである。中国共産党の創設者陳独秀（1879～1942）も魯迅（1881～1936）、蒋介石（1887～1975）、周恩来（1898～1976）、郭沫若（1892～1978）等数多くの中国現代の代表的な政治家・知識人はみな日本留学経験者である。日本は中国近代化の啓蒙に役立ったと言っても決して過言ではない。

この100年の前半に於いて、日本は朝鮮・台湾・香港・シンガポール・東南アジア・中国へと戦火を交えて行き、言わば軍事立国を目指した訳であるが、結果的には多大な犠牲と同時に、インフラストラクチャーが整備され、教育が普及した。後半に於いては、ほぼ同じルートから、つまりNIES・ASEANから中国へと経済の高度成長を押し進めて行った。言うなれば貿易立国であるが、それだけ又中国を含むアジア地域の本格的な近代化をリードしたとも言える。江沢民国家主席の言い方を振って言えば、「中国を含むアジアの近代化のカギは日本にある」となるかも知れない。

人種・文化・思想・風俗・慣習の類似性から言って、中国にとって、日本は欧米・ロシアより近い。大国外交重視の中国が近年他国と結んだパートナーシップの性格からもそれが分かる。中米は「建設的な戦略的パートナーシップ」であり、中ロは「戦略的な協調パートナーシップ」であるのに対して、中日は「友好協力的パートナーシップ」である。日本は欧米諸国と価値観

を共有するが、中国の価値観を理解出来るのは日本を置いて他にない。そう言えば、この「価値観」という言葉さえ、中国にとってはそれまで聞き慣れない言葉であった。単純極まり無い階級観に置き換えられてしまい、考えは硬直し、思惟は枯渇状態に陥っていた。先進国になるには先進国の近代化した産業・農業・科学技術・経営管理を学ばなければならないのは言うまでもないが、それよりもっと大事なのはそれらを生み出した体制・法律・システム、そして価値観を学び、身に付けるということである。即ち、価値観の衝突・融合である。そのような価値観も含めて、ヨーロッパ文明・アメリカ文化を直接導入出来るようになった現在でも、日本の窓口的・仲介的役割は変わらない。日本は中国が目指す近代化・先進国化の鑑・手本であるだけでなく、一番の貿易相手国、大事な投資国でもある。であるからこそ、なお一層日中関係に時々響く、「歴史認識」のような「雑音」が気になる訳であるとも言える。

3. 国民感情が根本

日中関係が良好の時は過去のことは言わない、水に流す、過ぎ去ったものは過去のものとして、前向きに、未来志向と言い、摩擦が起こった時は未来を見ずに、過去の教訓を汲め、反省・謝罪しろと言う。或いは裏の側面である交流は人民が進め、表の側面である戦争は軍国主義者がやったという単純な割り振り方では問題解決にならないし、何時まで経っても日中間の真の相互理解・相互信頼・友好協力の関係は結ばれないであろう。

政治家は、いい場合は国益を第一位に置き、悪い場合は私利私欲・党利党略ばかり考える。どちらにせよ、環境・情勢に目を向け過ぎ、物事を打算的・便宜的にとらえがちである。中国共産党の元総書記であった胡耀邦氏が何時どこで話したかは忘れたが、政治家にとって、昨日の友が今日は敵であり、今日の敵が明日は又友であることは日常茶飯事であると言ったのを覚えている。それから、政治家は建前と本音をよく使い分ける。と言うよりも、往々にして本音を隠し、建前だけを言う。真意を測りかねる。日中関係をこのような政治家に任せればなしにしておいたら、大変なことになる。国民一人一人が責任を自覚し、積極的に関係構築に取り組まなければならない。それで、国民感情が一番のポイントになってくる訳である。

聞き慣れた言葉に「親日派・反日派・知日派」或いは何々「家」というのがあるが、中国では、特に「親日派」には日中戦争の陰翳が重なり、裏切り者の意味の「漢奸」と同義語である。親日とは、日本となるとべた褒めすることであり、反日とは、日本を毛嫌いすることであろうが、全体的な国民感情としては多少クールな方が理想的であり、「派」或いは「家」としては「知日」が一番望ましいが、何しろ人間の感情、人の心のことであるので、強要は出来ない。

以上、序にしては多少長くなったが、このテーマの勉強をする契機となっただけでなく、中国の国民を代表する国家主席の日本観の一部ともなるので、記した次第である。

これから色々な中国人の日本に対する感情・心、つまり日本観とでも言えるようなものを見て行くつもりであるが、それは何々派とか何々家とかというふうに簡単に分類するのではなく(事実、それは不可能であり、非科学的でもある)、種々様々な日本観を調べ、なるべく整然と纏めたいと思っている。

II. 魯迅その人と日本との係わり

1. 魯迅の評価

筆者は30何年間魯迅の最後の10年の住まいの近くに住んでいたため、よくそのお墓のある虹口公園に遊びに行ったし、記念館も旧居も何回も見学している。但し、研究者ではないので、魯迅をどう見ると聞かれたら、一つは日本との関係が密接であったということと、もう一つは毛沢東の評価の通りであるとしか答えられないであろう。

つまり毛沢東が1938年10月の講演で話した、¹⁵⁾

魯迅は「中国第一等の聖人だ。孔夫子は封建社会の聖人だが、魯迅は新中国の聖人だ。」魯迅精神とは政治的な遠大な見識、闘争精神、犠牲的精神である。

それから1940年1月に発表した論文「新民主主義論」中の次の評価である。¹⁶⁾

「魯迅は中国の文化革命の主将であり、かれは偉大な文学者であったばかりでなく、偉大な思想家、偉大な革命家であった。魯迅の背骨はもっともかたく、かれには奴隷の根性やへつらいの態度がいささかもなかった。これは植民地、半植民地人民のもっとも貴重な性格である。魯迅は文化戦線で全民族の大多数を代表して敵陣に突入した、もっとも正しい、もっとも勇敢な、もっとも断固とした、もっとも忠実な、もっとも情熱的な、空前の民族英雄であった。魯迅の方向こそ中華民族の新文化の方向である。」

それは正にその通りであるが、これはあくまでも進化論から階級論へ進み、官吏・地主・紳士の階級の出自に反逆して、プロレタリア階級の仲間入りをし、「聖人・主将・偉大な文学者・思想家・革命家・民族英雄」（更に、毛沢東は「旗手」とも言っている）になってからの魯迅であり、又どこか血が通わぬ抽象的な魯迅像でもあるので、それまでの魯迅及びその作品並びに具象的人間魯迅を理解するには何かびんと来ないところがなきにしもあらずである。

日本に来て、色々な本が自由に読めるようになって、その不足感を徐々に補うことが出来た。特に、李長之の「魯迅批判」には大いに共感を覚えた。

「人は、生きなければならない——これがかれの基本観念である。だからこそ、人びとの死を忘れることができなかつたのである。その目で見、感じ、身に受けた生命への圧迫と傷は、数知れなかつた。傷あとの悲しみのなかで、時には麻痺を装わざるを得ないことさえあつた。」¹⁷⁾

「頑迷な農民性について、魯迅ほど知り尽くしている者はいない。曖昧さ、改革への逡巡、愚鈍、奴隷根性などに対する描写には、魯迅の魂が、余すところなく奥深く、細部にまで滲みわたっている。」¹⁸⁾

「進化論的、生物学的な、人は生きなければならないという人生観、さげすみとあざけりをバネにした感情、加えて堅固で、執拗このうえない反抗性、これこそ魯迅の真骨頂である。環境が彼の性格と思想の輪郭を形成したが、みずからも環境から出路を見出し、使命をになつたのである。」¹⁹⁾

「人間の環境は、人間の事業を制約する。だが人間の性格は、逆に人間の環境を選択する。……その代表として魯迅をあげることができるだろう。」²⁰⁾

「魯迅が一人の詩人であることに疑いをさしはさむ余地はない。そして思想面からみれば、一人の戦士にすぎない。」¹⁹⁾

「魯迅の精神の深部に横たわるものが粗忽、無味乾燥、荒涼、暗黒、脆弱、疑い深い、腹を立てやすいことだとしても、だがそれ故に、永遠の詩人、時代の戦士たりえたことに疑いをさしはさむ余地はない。」²⁰⁾

鋭い観察力、研ぎ澄ました神経、繊細な感受性、堅忍不拔の意志、不撓不屈の精神、「苦痛と暗黒より外ない一種の人生観」²⁰⁾の持ち主、それが魯迅であるが、生涯民族の危機を憂い、国民性を恨んだ。愛すればこそ憎む、このことを魯迅ほど実行した中国人は他にいないであろう。その魯迅が果たして日本をどう見ていたかということは誰でも興味と関心を持つであろう。

2. 魯迅と日本

魯迅は1902年20歳の時、留学生として日本に派遣され、最初は東京の弘文学院で、次に仙台医学専門学校で勉強した。筆者は幼少期の10何年間を仙台市内の魯迅の下宿先に近い荒町で過ごし、後には東北大学の客員教授を務めたこともあるので、なお親近感を感じる訳であるが、魯迅は東京にいた時親友の許寿裳に対し、「よく次の三つのお互いに関連のある問題に就いて話をした。一つは、理想的な人間性とは果たしてどういうものか。一つは、中国の国民性の中で最も欠乏しているものは何か。一つは、その病根はどこにあるか。」²¹⁾魯迅が医学を専攻し、又そのためにドイツ語を習い始めたのもみな明治維新を経て、近代化に成功した日本に倣う、所謂明治維新信仰と同時に、或いは、というより、日本を通してヨーロッパ文明を学び、中国の民族危機を救うためであることは明らかであるが、結局は体より心、肉体より精神、中国人の精神の改造・国民性の改造が喫緊且つ重要と悟り、文学の道に転じた。20歳代というのは人間形成・人生観確立にとって、一番大事な時であるが、それを魯迅は日本で体験したのである。

魯迅が「藤野先生」²²⁾ではっきりと「ともかくこの時、この場所で、私の考えは変わった」と言っている通りであるが、もう一つ大事なことはつまりその藤野先生のことである。「なぜか、私は今もって事あるごとに先生のことを思い出すのである。私が師と仰ぐ人のなかでも、先生は私が大きな感銘を受け、大きな励ましをあたえられた人の一人である。」「いつも夜になって疲れが出、ひと休みしようかと思うとき、顔を上げて、灯りの中の先生の浅黒い痩せ形の顔が、今にもあの抑揚のある口調で話しかけてきそうになるのを見ると、私は俄然良心に目覚め、勇気が満ちてくるのを覚える。そこで、やおらたばこに火をつけ、『正人君子』の輩の憎悪的となっている文章を書きつぐのである。」この件を中学校の国語で始めて習って以来何回読んだことであろう。そして又、魯迅記念館・旧居で藤野先生の写真の前に立ち、或いは朱筆で添削された魯迅のノートを見る度に、筆者は胸が突き上げられ、自ずと直立不動の姿勢になり、頭が下がり、目頭が熱くなるのである。熱血漢である藤野先生も然ることながら、魯迅の藤野先生に対するその気持もこの上になく美しく、崇高で、これは魯迅と日本の関係を一番端的に現しているものである。

魯迅が50歳になった1931年の3月から12月までの10ヶ月間、毎日午後3、4時間

魯迅は当時30歳だった増田渉に著書「中国小説史略」や小説「呐喊」、「彷徨」等に就いて講義をし、質問を受けた。彼が帰国してからも二人の間の文通は魯迅が亡くなる寸前まで続いた。その時受けた印象を増田渉は後に「魯迅の印象」という文章にして出しているが、²⁰⁾ 人間魯迅をその風貌・顔付き・言葉遣い・手振り・物腰・身なりから人柄・性格・性癖・気質・趣味・家族・交友関係・思想・仕事等に至るまで実に多方面に亘って詳細に記述した文章は他に類を見ない。「文章で見る魯迅と、直接話しあっているときの魯迅とでは、ちょっと勝手がちがうような気がした。深刻めいた顔つきや言葉づかいをせず、いつも軽いユーモアをとばしてニコニコしている気のおけない人であった。一しょに向かいあっていて、緊張感などは私は感じたことはなかった。文章にみる皮肉や毒舌は影さえなく、むしろ子供のように天真な人柄であった。」それは確かに魯迅は誠実で温和な人であるには違いないであろうが、その半面、相手が日本の友人であったので、気を許したところがあったということも否定出来ないであろう。「魯迅全集16」²⁰⁾ に掲載されている増田渉宛の58通の手紙の内、署名は「迅」が19通、「墮落文人」と誰かから罵られ、それを振って魯迅が自分で付けた「隋洛文」という名前の「洛文」が29通である。とにかく苗字抜きの名前だけの署名が48通、83%を占め、二人の間の信頼・親しさが分かる。

李長之が言う²⁰⁾ 魯迅の「精神發展上、頂点に達し」、「健康で生氣に溢れていた」段階と「国民性への攻撃をふたたび開始し」、「反封建文化の使命が、いっそう明確に反帝国主義の闘争に転化している」段階とを合わせた最後の10年、内山完造は魯迅と刎頭の交わりをした。魯迅は毎日のように彼の経営する内山書店に通い、必要とする書籍等をそこから取り寄せ、言わばそこを情報収集の窓口にした。人に会ったり、連絡を取ったりする時もそこを拠点にした。内山完造は魯迅とその家族の健康・生活上の面倒を見ただけでなく、国民党政権の圧迫から魯迅を守り、魯迅も又内山完造に「全幅の信頼をおいていた」。²⁰⁾ 魯迅の身辺に危険が迫った時は隠れ家を捜したり、自分の家に引き込んだりして、彼を守り通した。もしも内山完造という日本人がいなかったら、魯迅一生の中で一番大事な活動や闘いは出来なかったであろう。

魯迅の絶筆となったのは内山完造宛の手紙であったし、「意外なことで夜中から又喘息がはじめました。……お頼み申します。電話で須藤先生に頼んで下さい。早速みて下さる様にと。」²⁰⁾ と頼まれ、急いで駆け付け、危篤に陥った魯迅を見守り、「完造が疲れやしないかと許広平が余り心配するので、完造は夜中の十二時頃、いったん家に帰ることにした。……『すぐ来てください。』……駆けだした。完造は臨終に五分おくれた。顔も手もあたたかい、それなのに呼吸は絶え、脈もとまったままである。『僕の病気はどうなっているのだろう』魯迅の声が完造の耳の中で駆けまわっていた。」²⁰⁾

仕事・勉強・生活と言い、自分及び母親、妻子の身の安全・病気と言い、魯迅は中国人ではなく、日本人に頼っていた訳である。心を許せるのも、それは一部の日本人であるかも知れないけれども、兎に角日本人である。この事実を果たしてどう見るべきであろうか。

いずれにせよ、魯迅の一生は日本と切っても切れない関係にあるのである。

Ⅲ. 日本は鏡

1. 日本人は真面目

魯迅は1936年3月、内山完造著「生ける支那の姿」の中国語版訳者宛の手紙ではっきりと²⁹⁾

「日本の国民性はたしかに立派です」

と認めているし、満州事変直後の1931年11月にも、³⁰⁾

「排日の最中であって、私はあえて断固として中国の青年に忠告を一つさしあげたい。それは、日本人は私たちがみならうだけの価値あるものをいっぱい持っている、ということである。例えば、自分の本国や東三省について、彼らは平常からたくさんの書籍を出して——ただ目下投機的に出版されたものは除くべきであるが——外国に関するものは、もちろんなおさら言うまでもない。私たち自身何があるか。墨子を飛行機の元祖となす以外に、中国は四千年の古い国でありながら、こうしただつのがらないたわごと以外に、いったい何があるというのか。」

と書いている。

内山完造の記憶によると、魯迅は病床にあったある日、彼にこう語ったそうである。³¹⁾

「僕は寝ているあいだに発見したよ。それは中国四億の人民が『馬馬虎虎』という病気にかかっていることだ。この病気を治さない限り、中国を救うことはできない。だが、日本にはこの病気を治す特效薬がある。それは、日本人の真面目な態度だ。だから、日本の全部を排斥しても、この薬だけは買ってこなければならない。今度の病気が治ったら、僕はそう言うつもりだ。」

亡くなった内山書店店員の鎌田誠一のために書いた墓記にも、³²⁾

「勤勉にしてしかも実直、兼ねて絵の事を修め、燦然たる成果を挙げぬ。」

と記しているし、1932年11月北京輔仁大学の講演では、中国の青年や学生が真に「抗日」か否かは別として、ただ単に「抗日」関係のバッチを持ったり、軍服姿の写真を残し、訓練服を家の中に置き、処分するのを忘れてして、日本軍に捕らえられていくことに就いて触れ、³³⁾

「いったん日本軍に探し出されれば、それも命を失うものになります。このような青年が殺されますので、みなは大いに不平を鳴らし、日本人は残酷すぎると思いました。しかし、これはまったく気質のちがいによるものです。日本人がまじめすぎるのに、中国人がふまじめすぎるのです。中国のことがらは往々にして看板をかかげればそれで成功ということになります。日本人はそうではありません。彼らは中国のように芝居をやるだけ、ということとはちがいます。日本人はバッチや訓練服があるのを見れば、必ず彼らをほんとうに抗日している人間と思ひこみ、むろん強敵だとみなします。こんなふうにあつてふまじめな者がまじめな者とぶつかれば、どうしたってひどい目にあいます。」

と、話している。当時にしても、現在にしても、実に考えられないことである。日本は満州事変から上海事変、次から次へと中国に食い入り、なお虎視眈々と次の獲物を狙っているし、中

国全土には反日・排日・抗日の怒号が響き渡っている時に、大勢の若気の至りの学生を前にして、よくもここまで言えたものである。魯迅だからこそ出来たのである。その意味では今の政治家はその足元にも及ばない。階級観によれば、先ず敵か味方か、それで、もしも敵であったら、その全てが悪になり、敵の何かを一つでも褒めさえしたらもう「階級的立場」の問題にされ、地獄行きである。筆者が中国プロレタリア文化大革命中に一度「日本に行ってみたいなあ。」と口を滑らし、「帝国主義的傾向あり」というレッテルを貼られたことがある。

魯迅のこういった日本人観は始めからあったものではない。日本留学へ行く前から、日本は明治維新を経て、アジアで真っ先に近代化に成功し、西洋諸先進国と匹敵出来る国と見られ、それは日本人が優秀で、努力したせいだという見方が一般的であり、魯迅もそう思っていたかも知れないけれども、事実は³⁰

「ここ数日向こうの学生社会にもかなり入ってざっと推察してみました、その思想、行為は決してわが震旦の青年の上に出るものではないと敢えて断言しましょう。ただ社交が活潑な点では連中の方がうわ手です。楽観的に考えるならば、わが黄帝の魂はあるいは絶嗣のために餓えることにならずにすむでしょうか。」

「学校の勉強は暗記にうるさいばかりで思索を要しません。いくら勉強しないうちに頭がこちこちになってしまいます。四年たてばおそらくでくの坊みたいになってしまおうでしょう。」と、仙台医学専門学校に入って間もなく語っているように、日本人を大して評価もしていないし、中国の国民性をそう悪くも言っていない。やはり長年に亘って、日本・日本人を知り、培われたのであろう。

2. 模倣は短所ではない

中国は日清戦争に負け、中華思想が崩壊し、日本を最早朝貢国等と思うことは出来なくなったばかりでなく、日露戦争にもなんと勝ったので、日本に倣わなければならないという風潮にはなっても、日本を多少馬鹿にするところがなきにしもあらずであった。それは当時も今も同じである。その現れの一つが所謂模倣、物真似のことである。

明治維新までは、中華文明に倣い、中国文化を導入し、政治・法律・産業・技術・宗教・文化・文字、衣食住全般に亘って、中国に右に倣えをした。明治維新以降は、脱亜入欧し、ヨーロッパ文明に倣った。それはそれで成功したかも知れないが、とにかく日本には日本独特の文化等あまりないというのが中国人の一般的な見方である。現在でも、日本の技術は進んでおり、例えば家電製品も性能が優れており、精巧であるけれども、ほとんど欧米、特にアメリカの真似をしているに過ぎないと誰しも思っている。それが原因して、清末民国初と違い、今は世界中どこへでも行けるようになったので、優秀な留学生は先ず米国を目指すようになっている。言葉は悪いが、おこぼれが日本へと行ってもいいくらいで、出世し、功成り名を遂げ、帰国してから、欧米留学経験者は幅を利かせているのに対し、日本留学経験者はどちらかと言うと小さくなっている。

人を馬鹿にする人ほど馬鹿であると言うように、「中国は、一貫していわゆる『排他政策』をとってきた。……鉄砲と大砲によって表門を打ち破られてからは、さらに、続けざまに壁に

頭をぶつけて、現在は何事によらず、『届ける』政策になった。」³⁰

と、魯迅は中国の鎖国的な方針に鋭いメスを入れ、それより大事、強調すべきなのは「もってこい政策」であり、

「我々は、頭をつかい、視野を広くし、自分で持ってこなければならぬ。……我々は、あるいは使用し、あるいは放置し、あるいは破毀する必要がある。……しかし第一に、その人は、着実で、勇敢で、識別の力を具え、非利己的でなければならぬ。持ってこないかぎり、人は、自ら新しい人間になれない。持ってこないかぎり、文学芸術は、自らを新しい文学芸術にしていくことはできない。」と、書いている。

ここでもう一つ大事なはこの「もってこい政策」にイデオロギーを絡ませてはならないということではなからうか。中国に共産党政権が出来た当時は所謂ソ連一辺倒政策をとった。学校教育で言えば、小学校から大学まで、国語や中国史を除き、全てソ連の教科書を使用するようにし、外国語もそれまでの英語を廃止し、ロシア語に変えた。英語の教員も習いながらロシア語を教えた。ところが、ソ連が「修正主義」化し、中ソ関係が悪化してからは一斉にそれらを廃棄し、急いで自分で教科書を作り、外国語教育も英語に切り替えた。ロシア語を教えていた教員は又紙屑かごの中から英語のペーパーを拾い上げ、忘れかけた英語を教えるようになった。結局はどの外国語も身に付かず、教育全体のレベルダウンを招いた。文化・社会・経済・政治、みな然りで、何十年と堂々巡りばかりして来た。

魯迅が1929年1月に、落谷虹児の画選を中国の読者に一つの小さな鏡として紹介したことがあるが、日本は正に中国の「鏡」なのである。

「日本の翻訳界はたいへん豊富です。適切な人材が多く、読者も少なくありません。したがって有名な作品にはほとんど翻訳があります。わたしの考えでは、ドイツ以外、他国の作品を紹介するのに熱心なのは、おそらく日本でしょう。ただし、ソ連の文学理論の紹介はさいきん大きな欠点があります。……したがって、日本語に頼るだけでは不十分で、ソヴィエト・ロシア文学を研究したければ、ロシア語がわかったほうがよろしい。」³¹

そのロシア語を習うにも、日本語が分かった方が便利なので、先ず3、4年日本語を習うべきと提唱している。その魯迅自身、日本留学時代に、日本語の外にドイツ語の勉強に力を入れたのは周知の通りである。

二つの外国語の関係に就いて、魯迅は更に次のように言っている。³²

「わたしの考えは、日本語は論文が読めればそれでよいということです。彼らは紹介するのが早いからです。文芸を読むのは労多くして功少なし、です。……しかも我々外国の読者の労力に酬いる偉大な創作はありません。……欧州には大作品があります。どうして、日本語を学ぼうとする精力をもって、西洋の言語を学ぼうとなさらないのですか。」

日本をあくまでヨーロッパの窓口と位置付けしていることが、次の話からも分かる。³³

「日本では、近ごろは特に厨川白村のような人をみません。……随筆の類も時に出版されますが、読んでみても大抵浅薄で味がなく、あってもなくてもよいものです。要するに、社会と文芸のよい批評家はみあたりません。」

日本の外国紹介の姿勢に問題がない訳ではない。魯迅の批判は痛烈である。³⁴

「日本人は中国語の文章を読むのが比較的容易ですが、彼らの著作を読むとやはりでたらめが多い。上海にきて半月もすると本をだし、ルーレット賭博、私娼、といった類のことを書き、中国はどこもかしこも、打つ、買うの天国だといわんがばかり。」

それでも全体から言うと、日本は外来文化の吸収・消化が全方位で、迅速で、効果的である。魯迅は1934年8月に発表した「子供の写真のこと」という雑感の中で、次のように喝破している。⁴⁰

「その師が我々の仇敵であろうとも、我々は師から学ぶべきである。わたしは、ここで、現在、人々が触れたがらない日本をとりあげよう。日本が、模倣がうまく、創造に乏しいことは、中国の多くの論者が軽蔑している。しかし、彼らの出版物と工芸品を見ると、早くから中国を凌駕している。『模倣がうまい』のは、決して短所ではないとわかるのである。我々は、その『模倣がうまい』ことを学ぶべきである。『模倣がうまい』ことに、創造を加えたなら、なおさらよいのではなからうか。さもなければ、ただ、『痛恨して死ぬ』だけなのである。」

3. 日本もまだ本当のことが言える処ではない

「魯迅全集16」に内山完造宛に書いた手紙が10通載っているが、どれを読んでも心が温まる。東京へ一時帰国した内山完造宛に、1932年4月13日、⁴¹

「書店にも毎日行きますが、も一漫談などがありません。矢張りさびしいです。あなたは何時上海へいらしゃいますか？ こちらからは早く帰る様にのぞんで居ります。熱心に。」と書き、その2週間後に又、⁴²

「北四路も毎日毎日賑くなって来ました。ところが先生なかなか帰って来ません。漫談は戦争よりも永いようです。それは実に驚いて仕舞いました。」

と書き送っている。もう寂しい、待ち遠しい、首を長くして待つどころか、恨むようにしてまで相手を急かしている。魯迅が内山完造にここまで深い愛情を抱いていたとは驚かされるばかりである。

魯迅が北京へ行ったら、着いたその日の夜にすぐ内山完造宛に手紙を認め、⁴³

「御贈与下さった蒲団を母親に差しあげました、非常によろこんで厚く御礼を申し上げるようにといいましたから謹んで伝言致します。

私は汽車のなかによく食い、よく睡りましたからごく元気になって居ります。」と御礼を言い、元気であることを知らせている。実に身内以上である。

二人の間は又本当に明るく、言葉遣いもユーモアに富んでいる。魯迅は面と向かっては何時も内山完造を紹興弁訛りのある上海弁で「老板」と呼んでいたそうであるが、そのニュアンスは「旦那」よりもむしろ「おやじ」に近いようである。

候文で手紙を書いては、末尾に「御令閨殿下によろしく御伝言被下度。」⁴⁴と書いているところ等、本当に微笑ましく、これがかの「横眉冷对千夫指」(眉を横たえて冷ややかに対す千夫の指)、「寸鉄人を殺し、一刀血を見る」鋭い魯迅と同一人物であるかと疑うくらいである。やはり李長之や増田渉の魯迅観の方が真実に近いと言わざるを得ない。

そして、その1932年4月13日の手紙になんと非常に重要なことが書かれているのであ

る。

「私から見ると日本にも未、本当の言葉をいうべき処ではないのでちょっと気を附けないと皆様に飛んだ迷惑をかけるかも知りません。」

つまり日本にも言論の統制、検閲制度があるということである。⁴⁵⁾

「日本では、なるほど階級闘争を語ることを禁止しているが、世界に階級闘争がないとは言っていないが、中国では、世界には、実は、いわゆる階級闘争はなく、みなマルクスが捏造したのだと言う。……日本は、確かに書籍・雑誌の禁止、削除をしているが、削除の箇所は、空白を残して読者が一眼見てそこは削除されたとわかるようにした。中国では、空白を残すことを許さず、必ず、つづけなくてはならないから、読者の眼には、やはり完全な文章のように見え、ただ作者が意味不明のわけのわからぬことを言っているだけであった。」

当時からして中国の方がひどかったし、現在日本では憲法で言論統制・検閲が禁止されるようになったのに対し、中国は旧態依然どころか政権交代で更に一段と悪化した。増田渉に「魯迅と日本」という文章があるが、その中国語版⁴⁶⁾と言ったら、誤訳だけでなく、勝手に削除したり、すり替えたり、それがそう長くもない文章なのに、なんと50カ箇所以上に上り、見るも無惨な姿である。

勿論何もかも中国の方がひどいということではない。

「日本の一切の左翼作家のなかで、現在転向していないのは二人だけしか残っていません(蔵原と宮本)。お二人はきっと驚かれて、彼らは中国の左翼が頑強であるのに及ばないと考えられるとおもいますが、ものごとは比較してから論じなければなりません。彼らのところの圧迫の手段は、まことに組織的で手ぬかりがないのです。彼らはドイツ型で、精密で周到です。中国がこれを真似ると状況はちがってきます。」⁴⁷⁾

このような体制・制度とは直接関係なしに、日本人の慣習として、魯迅はいくつか挙げている。

その一つは、日本人は軽々しく意見を言わないということである。

「日本の二人の画家は返事をくれるかもしれませんが、ふつうの社交辞令的なものだろうとおもいます。彼らにあっては、作家と批評家は分業で、ごく親しい友人でないかぎり、かるがるしく意見をのべないのです。」⁴⁸⁾

「彼らの習慣は我々と異なり、非常に遠慮深いのです。かるがるしく発言しません。それで、真実の——社交的ではない批評をうけようとしても、それはできないのです。」⁴⁹⁾

もう一つは、日本人は結論を好むということである。

「これも自分の発見でなく内山書店で漫談を聞いて居たときに拾ったものだが日本人程結論を好む民族、即ち議論を聞かうが、本を読まうが若し遂に結論を得なかつたらどうしても気がすまない民族は、今の世の中に頗るすくないらしいと云ふことである。」⁵⁰⁾

「彼らが、急いで結論を求めるのは、実行を急ぐからである。」⁵¹⁾

結論を求め、実行を急ぐことは、真面目さの現れでもあり、性急の一言で片付けたり、一笑に付してしまったりしてはいけぬ。それに対し、中国人は何人か集まると、すぐとりとめもない四方山話を始め、タバコを吸い、お茶を飲みながら何時までも続ける。何事をするにも、

「慢慢地」(ゆっくりと)、実にのんびりしている。それを悠久な歴史を持つ大国の国民性とするのは怠け者の言い逃れに過ぎず、全くのお門違いである。

4. 中国唯一の出路は民族革命戦争

魯迅の評価或いは魯迅文学の本質に関する見解や説は幾つもあるが、魯迅の「人間としての性質の善良さについては衆評が一致している」⁸⁰ し、魯迅が「正義感の強い、虚偽の憎悪者」⁸⁰ であり、「孫文が革命の父と呼ばれるように、魯迅は現代中国の国民文化の母である」⁸⁰ ことに誰も異論はないであろう。

その魯迅の日本と中国の間に起こりつつある戦争に対する態度にも議論はあるまい。確かに、1931年9月18日から30日までの日記⁸¹ を捲ってみても、内山書店に本を買いに行ったり、愛児海嬰の満2歳の誕生日で建人弟を呼んで来て飲んだりしたとか、或いは26日は「旧曆中秋という、月、はなはだ良し」というような「中秋」の名「月」に関する記載はあっても、満州事変には片言隻語も触れていない。1932年1月28日辺りの日記⁸² にはさすがに上海事変のことが記されている。28日「午後、付近きわめて騒然とす。」、29日「戦火に遭う。終日、銃声、砲声を聞く。」、30日「午後、一家全員で内山書店に避難す、衣服数着を携帯するのみ。」、そして、2月1日から5日まではなぜか「失記」となっている。

手紙は、1932年2月2日許寿裳宛の手紙に次のようなことを書いている。⁸³

「このたびの事変は、まことに思いもよらぬもので、突如として火線に陥り、血ぬりの刃が途をふさぎ、飛びくる丸が室に入ることになり、ほんとうに命は旦夕に在りといった腹づもりをしました。二月六日に、やっと内山君が方法を講じてくれ、妻子をひきつれ英租界に入ることができました。書籍文具は一つも持ってこなかったけれども、大人も子供も幸いにつがなく、まずは御安心ください。」

二つの事変を起こした日本を呼ぶにもほとんど、「侵略者」とか「帝国主義」、「軍国主義」、「ファシスト」呼ばわりせず、普通の呼び方をしている。

「日本が、遼寧、吉林二省を占領して以来、……」(1931年11月30日)⁸⁴

魯迅自身が書いたのかどうかは確定出来ないが、一応魯迅の名で1933年に発表された「同志小林の死を聞いて」という文章では、⁸⁵

「日本ト支那トノ大衆ハモトヨリ兄弟デアル。資産階級ハ大衆ヲダマシテ其ノ血ヲ界ヲエガイタ、又エガキツツアル。」

となっている。それに対し、「魯迅全集10」の原注は「日本ファシスト政府」と決めつけている。

「ある国が、青島から撤兵したとき、ある人は、万民傘に名をつらねることを『メンツがある』と思ったのである。」(1934年10月)⁸⁶

1936年4月号の「改造」誌に発表された日本語で書かれた「私は人をだましたい」という文章では、⁸⁷

「昨年の秋か冬、日本の水兵が……」

「日本の方は『事変』の云ふのをすくらしい」

となっているのに対し、「魯迅全集8」の原注は「日本侵略者」と呼んでいる。

北京輔仁大学での講演でも、「日本兵」や単に「日本人」という表現をしている。⁶⁰

「私はそのとき、日本兵が戦いをやめたのを見てもどってきたのですが、しかし突然また緊張しました。……日本人にしてみれば、このような時節ですから、中国人はきっと中国を救うことにみな忙しいのだと思ひこんだのであって、中国人があんなにも遠方の月を救いにいこうとは、考えてもみなかったのです。」

だからと言って、魯迅が親日的だとか言おうとしているのではない。これには確かに何らかの感情なり意識なりが働いているには間違いないであろうが、魯迅の反戦の姿勢・態度は明瞭である。

「いま中国の革命的政党が全国人民に提出した抗日統一戦線の政策はわたしは見た、わたしは支持する、わたしは無条件にこの戦線に加入する。その理由は、わたしが、一人の作家であるばかりでなく、一人の中国人だからである。その政策は、わたしにとっては、非常に正確だと認める。わたしがこの戦線に加入しても、もちろん、使用する物はやはり一本の筆であり、できることはやはり文章を書き、翻訳をすることである」⁶¹、

「民族革命戦争の大衆文学は、決して義勇軍の戦いや、学生の請願デモ……等々の作品を書くことだけに限定されるのではない。……現在、中国の最大の問題、万人共通の問題は、民族生存の問題である……あらゆる一切の生活（食事や睡眠を含む）は、みなこの問題とかわりがある。たとえば、食事は、恋愛と無関係で差し支えないわけだが、現在の中国人にとっては食事も恋愛も、すべて日本侵略者にいくらか関係がある。それは、満洲と華北の状況を見れば明らかであろう。中国の唯一の出路は、全国一致して日本にあたる民族革命戦争である。」⁶²

これは1936年7月、魯迅の病中口授し、O・V・が筆録したものであるが、「日本侵略者」と言っている。

同じく魯迅が口授し、O・V・が筆録した同月の別の書簡で、魯迅は次のように言っている。⁶³

「あの着実に、大地を踏みしめて、現在の中国人の生存のために血を流して奮闘している人々を同志として持ち得たことは、自ら光栄だと思っております。」

それより半年前の手紙で魯迅は、

「義軍の記載は読みました。このようであってこそ戦士と称することができ、私のように筆を弄ぶ人間を慚愧させます。」⁶⁴

と自ら書いている。

5. 相互理解は難しい

魯迅と日本人の交際、交流は多い方で、特に内山完造・増田渉等は長年来の知己であったが、全体から言って日本人との付き合いは難しいと魯迅は晩年に至るまで思っていた。

「自分の考では地位、殊に利害さへ違へば國と國との間は云ふまでもなく、同國人の間でも相互に瞭解しにくいのである。」⁶⁵

「名人との面会もやめる方がよい。野口様の文章は僕のいうた全体をかいていない、書いた部分も発表のためか、そのまま書いて居ない。長与様の文章はもう一層だ。僕は日本の作者と

支那の作者との意思は当分の内通ずる事は難しいだろうと思う。先ず境遇と生活とは皆な違います。」⁶⁰⁾

当時、日本は中国は政治・経済・社会・文化全般に亘って停滞し、ヨーロッパ諸国に大変遅れを取ってしまった、「中国は弱国であるから、中国人は当然低能児である」⁶¹⁾ というような中国・中国人蔑視の風潮であった。両国の国民の間にこのような壁が立ちだかっていたのでは相互理解は不可能に近い。

但し、「若しも永く或る土地に生活し、その土地の人民に接触して殊にその人民の魂にふれ、且つそれを感得して眞面目に考へて見れば、その國を瞭解することはあながち出事ないことでもあるまい。……自分の考では日本と支那との人々の間はきつと相互にはつきりと瞭解する日が来ると思ふ。昨今新聞には又盛んに『親善』とか『提携』とか書き立てて居るが、来年になつたら又どんな文字をならべるか知らんけれども、兎に角今は其時でないのである。」⁶²⁾

相手の「魂にふれ、且つそれを感得して眞面目に考へて」始めて、相互理解が可能になる。相当難しいことではあるが、「千里の行も足下に始まる」というように、倦まず弛まず努力すれば必ずやその日が到来する。

魯迅が日本の生物学者西村真琴博士のために書いた「題三義塔」という詩⁶³⁾でも「劫波を度り尽くして兄弟在り、相逢いて一笑すれば恩仇泯ばん」と歌っている。

増田渉が帰国する時に、魯迅は「日本の風光をしのび、私が東に帰るを見るにつけても自分の若かりし日のことを憶ふ」⁶⁴⁾ という意味の送別の詩を書いているし、又日本に赴く友人のために書いた詩にも、「頭をもたげて東方に浮かぶ雲を眺めていると、夢にまで見た日本の風土と友人のことが想い起こされる」⁶⁵⁾ という意味の文句がある。

魯迅は、このように、若かりし頃7年もいた日本がいつまでも懐かしく、日本と日本の友人に思いを寄せていたのである。

註

- 1) 人民日報、1998年11月27日、1面。
- 2) 同上。
- 3) 安藤正士・小竹一彰編、原典中国現代史、第8巻、日中関係、岩波書店、1994年12月、293ページ。
楊尚昆国家主席の天皇皇后歓迎宴におけるあいさつ（全文）は「尊敬する日本国天皇皇后両陛下」で始まっている。
- 4) 同1)、6面。
- 5) 人民日報、1998年11月29日、1面。
- 6) 同上。
- 7) 同3)、215ページ。
- 8) 毎日新聞、1999年（平成11年）8月7日、1面。
- 9) 同上、2面、25面。
読売新聞、1999年（平成11年）8月7日、5面。
- 10) 日中月報、第228号、社団法人日中協会、1999（平・11）年5月、18ページ。
- 11) 岩波講座現代中国別巻②現代中国研究案内、岩波書店、1990年8月、322ページ。

「中国の軍隊と人民がうけた損失は1000万人以上であり、財産の損失額はアメリカドルで500億ドルをこえている。」

- 12) 増田渉・松枝茂夫・竹内好、魯迅案内、岩波書店、昭和31年10月、196ページ。
- 13) 毛沢東選集、第二巻、外文出版社、1968年5月、511ページ。
- 14) 李長之著、南雲智訳、魯迅批判、徳間書店、1990年5月、21ページ。
- 15) 同上、23ページ。
- 16) 同上、25ページ。
- 17) 同上、84ページ。
- 18) 同上、203ページ。
- 19) 同上、228ページ。
- 20) 同12)、195ページ。
- 21) 許寿裳、我所認識の魯迅、人民文学出版社、1978年6月、7ページ。
- 22) 魯迅全集3、学習研究社、昭和60年11月、169ページ。
- 23) 増田渉、魯迅の印象、講談社、昭和31年7月。
- 24) 魯迅全集16、学習研究社、昭和61年5月。
- 25) 同14)、31ページ。
- 26) 同23)、137ページ。
- 27) 同24)、600ページ。
- 28) 小泉謙、魯迅と内山完造、講談社、1979年6月、289ページ。
- 29) 同24)、608ページ。
- 30) 魯迅全集10、学習研究社、昭和61年8月、421ページ。
- 31) 内山完造、魯迅の思い出、社会思想社、1979年9月、324ページ。
- 32) 魯迅全集8、学習研究社、昭和59年11月、344ページ。
- 33) 魯迅全集9、学習研究社、昭和60年6月、460ページ。
- 34) 魯迅全集14、学習研究社、昭和60年6月、35ページ。
- 35) 同32)、52ページ。
- 36) 魯迅全集15、学習研究社、昭和60年8月、439ページ。
- 37) 同上、394ページ。
- 38) 同36)、166ページ。
- 39) 同36)、274ページ。
- 40) 同32)、98ページ。
- 41) 同24)、484ページ。
- 42) 同24)、485ページ。
- 43) 同24)、500ページ。
- 44) 同24)、534ページ。
- 45) 同32)、180ページ。
- 46) 劉猷彪、林治広編、魯迅と中日文化交流、湖南人民出版社、1981年8月。
増田渉作、林煥平訳、魯迅と日本。
- 47) 同36)、524ページ。
- 48) 同36)、479ページ。
- 49) 同36)、496ページ。
- 50) 同32)、302ページ。
- 51) 同32)、501ページ。
- 52) 竹内好、魯迅、未来社、1983年2月、8ページ。
- 53) 同上、52ページ。
- 54) 同上、174ページ。
- 55) 魯迅全集18、学習研究社、昭和60年11月、391ページ。
- 56) 同上、413ページ。
- 57) 同34)、552ページ。

- 58) 同30)、421ページ。
59) 同30)、437ページ。
60) 同32)、149ページ。
61) 同32)、544ページ。
62) 同33)、461ページ。
63) 同32)、595ページ。
64) 同32)、664ページ。
65) 同32)、661ページ。
66) 同36)、554ページ。
67) 同50)。
68) 同24)、584ページ。
69) 同22)、173ページ。
70) 同32)、303ページ。
71) 同33)、204ページ。
72) 同23)、140ページ。
73) 同33)、527ページ。

提要

1998年11月，中国江泽民国家主席访问了日本。这是日中关系开始以来，中国国家元首第一次正式访日。日方，包括国民和媒介在内，热烈期望双方都以展望未来的精神建立与充实21世纪的友好合作伙伴关系。但事与愿违，中方把重点放在以史为鉴上，始终强调所谓历史认识问题，最终给日中友好气氛泼了冷水，感情上导致相反的结果。

历史认识基于历史事实，这是不言而喻的。这100年的日中关系不只是战争的一面，还有交流的一面。日本应该深刻反省并谢罪。但其同时，日本也促进了中国的现代化，起了触媒剂的作用，这点应给以充分地评价。

日中关系的根本是国民感情，相互了解是其基础。这研究项目的目的是调查分析中国人的日本观。本文根据鲁迅的一部分言行来归纳他的日本观。

鲁迅被称为现代中国文化之母。他信仰明治维新，充分评价明治维新后的日本，认为中国应引为借鉴。他在一生中具有决定性意义的20到27岁留学日本，遇到了良师藤野先生。人生最后10年在上海又与内山完造、增田涉等结成知己。他与敌人开展顽强地战斗中也得到了他们的巨大无私的帮助。长期形成的他的日本观是全面的、友好的、客观的。他认为日本人是认真负责的。人们说，日本人很会模仿而加以轻视。其实，模仿不是短处。日本也不是什么都能说的国家。九·一八事变、一·二八事变后的态度也很明确，他是反对战争的。中国人和日本人兄弟，总有一天能达到相互了解，可是现在还不是时候，很困难。

鲁迅对日本抱有深厚的感情，到晚年都怀念日本和日本朋友，这是最可宝贵的。

